

第 15 回「人間を磨く（一）」

絶対的道德と相対的道德(モラルジレンマ)と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 15 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「人間を磨く」の第一回です。

『論語』を読みたいという方は非常に多いのですが、その何割かの方々は、『論語』で自分を磨きたいと思っていらっしゃる、そういう方です。

『論語』をお読みになる、学ばれるならば、それを子どもたちにも教えていただきたいと願っていますが、もちろん自分を磨くために、という在り方も結構なことと思います。

そこで今回は「自分を磨く」というテーマでお話ししましょう。

「自分を磨く」。ことばを変えますと、「修養」です。

この講座の初めごろに、「道徳」というのはこういうものだ、と大雑把に説明いたしました。

大事なことですので、もう一度説明いたします。

【道徳、三つの分野】

「道徳」という場合に、大きく分けて三つの分野があります。

第一は「絶対的道徳」。古今東西どこでも変わらないというもの。例えば、人を殺さない、他人の物は盗まない、火をつけないなどです。そういうことはどの地域、どの時代であっても許されざることです。これを否定することは誰にもできないことです。

二番目は「相対的道徳」。これは、価値基準がその時の話によって決まる。正解はない。どう考えるかという考え方の議論があると思います。以前は、三人の人間と一人しか乗れない船の話为例に挙げました。

どうすればいいのかと改めて考えるものを「モラルジレンマ」と言ひまして、これが「相対的道徳」の大きなテーマとなります。

三番目に「修養」があります。これは他の人は関係なく、自分自身の問題です。修養する。

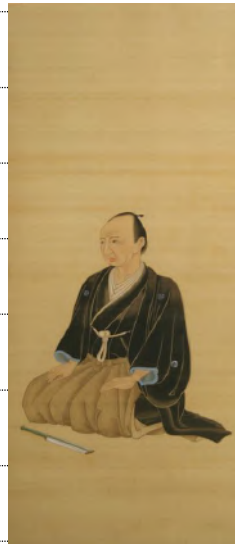
今回は三番目の「修養」につながるお話をします。

その前に。二番目の「相対的道德」「モラルジレンマ」については、世界中で議論されています。

もちろん、わが国でも。一例を挙げましょう。

【心学について】

江戸時代に「^{しんがく}心学」という学問があり、そのグループがおりました。これは^{いしばいがん}石田梅岩
という人が始めた、一種の折衷的な学問であります。



石田梅岩御像

出典：心学明誠舎蔵

この石田梅岩の心学は非常に広まりました。江戸時代の末期などは、全国至る所に心学の学
校がありました。

「心学」とはどういうものかと言いますと、中心となるのは「儒教」ですが、さらに仏教、神
道まで加えて、人々の生きるときの在り方を話し合う学問です。この心学のグループが得意
だったのが、「モラルジレンマ」でした。一例を挙げます。

侍の家AとBがありました、このAの子どもがBに養子に行ったという話です。ある日、A家
の実の父親が、B家の養父を訪れ、仲良く酒を飲んでいた。途中で喧嘩になりました。お互い

に侍ですから、自分が悪いとは申しません。

ついにふたりは刀を抜きました。このように、実の父と養父とが争っているとき、子はどうすればよいか。これはモラルジレンマですね。

実の父につくべきか、養父につくべきか、これはなかなか難しい選択ですね。二人とも殺気立っているので、容易に収めることはできません。という問題を投げかけます。

様々な意見を言い合い、それぞれが考えを述べます。

テキストには解決策が提案されています。

仮にどちらかに味方をした場合、大変なことになります。養父を助けて実父を殺したとすれば、親殺し。実父を助けて養父を殺しても親殺し。しかも仇討ちをしなければならない。ややこしいことになります。

そこで、「心学」ではこう答えています。

息子に対して、二人の父の前で「腹を切れ」と。こういう解決を出しています。

話には落ちがあります。腹の切り方です。腹を切るときは薄く切れと。皮の上にすっと線を引く程度で薄く切れと。つまり腹を切るという態度を見せればよろしいというわけです。

このように、モラルジレンマに対して、「心学」グループが盛んに議論していました。

さて、「修養」です。

『論語』の中には、「修養」について書かれたものがたくさんありますので、読んでいきましょう。全文でもいいのですが、前後の事情が複雑にからんでくる句もあるので、短く一句を切り取っています。

【修養についてのことば】

「己おのれに如しかざる者ものを友ともとする無なかれ」(学而第一)

自分に及ばない者、自分以下の者を友人とする必要はない、という意味です。自分より優れている人を友人としましょう、ということです。いいことばですが、友人からすれば、自分より下の者を友人とすることになりますね。

これが一つのジレンマになるわけですが、それは置いておいて。一般論としては、いいことばです。

^{あやま}「過 ^{すなわ}ちては ^{あらた}則ち改 ^{はばか}むるに ^{なか}憚ること勿れ」(学而第一)

人間は過ちを犯します。そのときは直ちに認めて、改める。

「憚る」あれこれ言って躊躇する、遠慮する、結果、改めない。そういうことではいけない、と言っています。前に「小人の過つや、必ず文る」とありました。これとつながっているとも言えます。

^わ「和もて ^{たつと}貴しと ^な為す」(学而第一)

「和を以て」と読まないのは、原文には、「以」という字がありませんので、その読み方は、文の構成上、こうならざるを得ないからです。細かいことは省略します。

「和」とは、前回「和して同ぜず」で申しました通り、公の、皆が納得する了解の仕方です。それが大事だということです。

これを「和を以て貴しと為す」として、聖徳太子が十七条憲法に書きこんだのです。憲法の中に入っているということは、聖徳太子はもちろん『論語』をしっかりと読んでいらっやったということです。

ですから「和を以て貴しと為す」という条文は『論語』を履んでいる。これが大事なことです。学んだことを履んで、そのことばを埋め込んで文章を書くというのが、知識を学んだ者の書き

方です。これは引用というより、『論語』の文を履んで書いておられる。

これが、かつての教養ある人の文の書き方、そういう例です。

今回は「人間を磨く」第一回のお話でした。